

「こころ」についてのシステム論的考察

大 山 泰 宏

Inquiry into “Psyche” from the viewpoint of System Theory

OYAMA Yasuhiro

誰もが「こころ」を持っている。私たち誰もがそれを了解しており、それは私たちの思考や言語行為の中で重要な役割を担う概念である。しかし私たちは決して、「こころ」そのものを人に指し示すことはできない。「こころ」とは、その言葉とともに立ち現れてくる「何か」であり、心理学はそうした曖昧な「こころ」を学問の対象とし、さまざまなモデルを用いることにより、説明しようとしてきた。この小論では、例えばオートポイエーシスシステム (Maturana & Varela 1980) の概念などによって、近年、開始された閉鎖型 (closure type)¹⁾ の記述方法によって「こころ」を捉えることを試みる。それは、これまでの入力型 (input type) の記述方法とは、まったく発想の異なるものであり、「こころ」を対象とする心理学や精神医学の枠組みを大きく変えていく可能性を持っている。そのことにより、特に臨床心理学などの、記述者が参与しつつ対象を記述してゆくという手法への基礎が与えられるとともに、「こころ」の病の理解についても新しい視点がもたらされられると思われる。

1. 「こころ」の入力型モデル

心理学において支配的な「こころ」の捉え方は、入力型の記述 (input-type description) に依るものであった。一般的には入力型の記述とは、定義された入力集合とそれが代入されるべき関数というモデルで記述を行う方法である。心理学的には、外界 (環境) の刺激が、特定の構造 (structure) を持つ「こころ」に入力され、なんらかの処理がなされることで、行動、表象、思考などの反応が生じるという記述方法である。これは心理学だけでなく、20 世紀の科学の標準的な記述方法として非常に馴染み深く、直観的にも理解しやすい方法であった。実際、様々な分野での実験計画は、この記述方法に基づいている。すなわち、対象に対して様々なバリエーションの条件設定や入力を行い、それに対応する変化や出力を調べ、対象の「しくみ」を類推するという手法である。心理学の分野でも、個体の置かれる環境条件を操作・定義し、それに対応する反応を見ることで個体の「仕組み」を知るという手法は、ごく模範的である。こうした「入力型の記述」は、確かに学問的に多くの実りをもたらしてきた。例えば、環境条件を明確に定義することで、実験や調査は、反復可能、検証可能となり、そこでの知識は万人に共有されうる客観的な「科学としての心理学」の条件を整えるものであった。しかし同時に、その便利さゆえの限界につい

でも、はやくから指摘されているところである。次には「入力型」モデルの持つ、基本的な前提について述べるとともに、その限界について言及してみよう。

・「こころ」の入力型モデルの基本的前提

「こころ」の入力型モデルには、いくつかの暗黙の基本的前提が存在している。それらは、相互に深い関連を持っており、究極的にはひとつの事態、すなわち、主観と客観の分離というお馴染みのテーマから派生したものであると言えるが、ここでは、詳細に区分して述べておきたい。

1) 内—外の境界設定 —— 環境と個体の実体化 ——

「入力」という言葉で既に示されていたように、「入力型」の記述は「外側」と「内側」の区別を前提としている。即ち、「外側」から区別された箱のような「内側」に、外側から何かが入ってくるというイメージである。もう少し心理学にひきつけて言えば、個体という内部と環境という外部との区別が設けられているということである。ここで注目すべきことは、内と外がそれぞれ独立の自存的なものとして、暗黙のうちに設定されているということである。すなわち、内側の存在は外側に影響を及ぼしたりすることではなく、外側での事象は内側とは関係なしに生起するという前提、そして逆に、外側が内側の構造を変えてしまうことはなく、内側はそれ自身で保存されているという前提を含んでいるのである。例えば、心理学の実験の状況を考えてみよう。実験条件（外側）を被験者（内側）が変えてしまっても、実験にならない。また逆に、実験条件のせいで被験者が変化を被ってしまっても、実験にはならない（選択された被験者群の差異は保存されなければならない）。被験者がいようといまいと、実験条件は一定であることが望まれ、また、被験者はその条件がどうであれ、構造的に変質してしまうことがあってはならないのである。その前提のもとではじめて、外側は操作・定義可能であり、環境操作による実験が可能になるのである。こうして、環境と個体はそれぞれ自存のものとして実体化されているのである。内と外の存在を独立に考える方法は確かに有効な方法であり、「科学としての」心理学の発展に大きく寄与してきたと言える。しかし、この手法では、人間の営みのほんの一部しか捉えられないのも事実である。人間は、環境に働きかける存在である。また、環境に応じて自らを変えていく存在である。環境に何の影響も与えず、環境から何の影響も受けない状況など、むしろ特殊である。考えられなければならないのは、環境と個体が相互に影響しあい変化していく一瞬一瞬の姿であり、それを描くことの出来る記述法が望まれるのである。

2) 観察者の特権的位置づけ

さらに「入力型」の記述では、観察者の特権的な位置が前提とされている。これは、観察者が現象の生起になんら影響を与えない、すなわち、観察という行為が観察対象に干渉を与えない、という前提である。観察者は、観察される事象の生起の外側にいる透明な目という位置を与えられているわけである。これを心理学の実験の文脈に引きつけて言えば、実験者は実験室での事象の生起になんら影響を与えないという前提である。実のところ心理学をやっている者で、この前提をともに信じている者はいまい。しかしながら、実験者や実験という設定そのものが事象の生起に影響を及ぼしているとは、うすうす感じられながらも、その事実は触れてはならない禁忌であるかのように、理論構築や考察の外に追いやられているのが実情であろう。また、観察の透明化ということは、観察対象を自存的な実体として見なしているということでもある。観察対象

は観察者とは無関係に存在しており、たとえ観察者が存在しなくても事象はそこにある、という前提である。従って、すべての事象は観察者の外側で、観察者に関係なく生起し、観察者はそれを知るだけであるとされる。「こころ」の外側で全ての事象は生起し、「こころ」はただそれを認識するだけである、という図式を導くこととなるのである。これは、上述の「内」と「外」の分離にも関連することである。

さらに、観察者の特権的位置づけは、次のような事態をも惹き起こしている。すなわち、観察対象に関するモデルを構築する際、そのモデルがあたかも対象に内在している秩序を表現したものであるかのような錯覚に、いとも簡単に陥ってしまうということである。しかし、対象についてのモデルは、実際には多分に観察者の理解の様式、認知秩序を反映している（Guidano, 1991）ばかりでなく、観察という行為の秩序の反映でもあると言える。例えば、「こころ」のモデルは、それぞれの時代の最新の機械のアナロジー（かつては蒸気機関、そして現在は計算機）の影響を受けている。そして何よりも、観測器具の影響を大きく受けているのである。どのくらいの精度で反応時間が計測できるようになったのか、どんな生理的指標が用いられるようになったのかなどなど、その時代の観測器具によって計測される事象が、モデルの構築には反映されているのである。また、精神分析における「こころ」のモデルも、実際はその治療者の患者への関わりの中から生まれてきた、治療者自身の理解の仕方にすぎない。しかし、観察者、観察の透明化は、その事実を忘れさせがちであり、患者に関わる「わたし」をまったく考慮せず、患者に内在する秩序を表現したものであるかのような錯覚をしばしば起こさせてしまうのである。

3) 平衡・最適化モデル（ロボットモデル）

「入力型」の記述モデルが、「平衡・最適化原理（equilibrium-optimalization principle）」ともいうものを前提としていることは、これまでもしばしば指摘されてきたところである。この原理によると、個体の「反応」とは、外的な刺激が入力されることで崩された平衡を取り戻すために行われるものであると考えられる。生理学的には、刺激が個体に与えられると、その最適覚醒水準が崩され緊張が高まるため、その緊張を解放し、再び最適な覚醒水準を得るために行動が生じると考えられるのである。特に感覚追求などの行動はこれによって説明されることが多い。そればかりでなく、Goldstein (1995) も指摘していることであるが、精神分析学の文脈においても「平衡」そしてその同義語である「ホメオスタシス」という言葉には重要な意味が与えられている。様々な人間の活動は、心的平衡を取り戻し維持しようという試みであり（快感原則）、その失敗や固着が、さまざまな心理的な病を形成すると考えられるのである。勿論、人間のある種の行動はこれで説明できる。しかしながら、心的な平衡を崩してさえも刺激を追求する行動が存在するのも確かである。たとえば、フロイトの反復強迫の概念²⁾、マズローが成長動機付け（growth motivation）と呼んだものなどがそうである。また、システム理論の創始者である von Bertalanffy (1968) は、平衡・最適化モデルを、「ロボットモデル」と呼んで繰り返し批判した。それによると、もしシステムの最終目的が、平衡状態の回復や維持であるのならば、なにも平衡状態にあるときに新たに活動を起こす必要はないわけである。従って、人間の活動は全て、なにがしかの外界の刺激に対する反応として考えられ、刺激が無いかぎりそれは生じないということになってしまう。これでは、人間の振る舞いを環境刺激に従属するものとして見なしていることになり、人間の主体性、自主性をあまりにも低く見積もってしまっている。従って平衡・最適化

モデルは、人間をロボットの位置にまで貶めることであると、フォン・ベルタランフィは厳しく批判した。彼が挙げる例のように、生理的・心的平衡を自ら崩していく行為である登山や、ソナタの作曲などのような創作活動は、決して「ロボットモデル」では説明できないのである。従って、人間の活動をもっと包括的に説明できる理論が必要となってくるのである。

以上のように、「入力型の記述」では、「こころ」の有り様を描いていくのには限界がある。非常に直観的な表現ですれば、内部決定や自己決定をおこなう自律的な「こころ」の姿を、十分に表現しきれないということである。また、入力無きところに生じる振る舞い、心的な平衡を崩してまでも行われつづける振る舞いについても、明確な説明を与えることができない。さらには、「こころ」と環境の関係の記述についても不満の残ることとなる。こうした問題点を解決する「閉鎖型の記述 closure-type description」について、次に述べてみよう。

2. 「こころ」の閉鎖型モデル

・閉鎖型モデルの諸前提 —— 構造 (structure) から組織化 (organization) へ

1) 境界設定の問題

閉鎖型の記述は、そのもっとも洗練された形である Maturana & Varela (1980) の自己創出理論 (autopoiesis theory) ばかりでなく、システムの振る舞いに関するいくつかの古典的な研究 (1960 年代の Walker & Ashby や Foerster の研究) にも既に見られていた。こうした理論は、厳密に言えばそれぞれに差異はあるものの、「作動上の閉じを形成するもの」としてシステムを理解する点で共通している。「閉じ」と言ってもそれは、壁のようなものでシステムが外界から隔てられているということではない。システムを閉鎖型で記述する場合の最も根本的な変更点は、「システムが構造 (structure) ではなく、組織化の活動 (organization) として考えられる (Varela, 1984)」ところにある。システムとは、もっとも概略的には「構成要素 (element) の有機的連関」として定義される。入力型の記述では、システムとは、部品のような構成要素が相互に結びつき、それがひとつの全体としての「構造」をなしているものとして考えられるであろう。しかし、閉鎖型の記述においては、構成要素の定義から既に大幅な変更が加えられる。すなわち、構成要素とは、システムの働きによって、そのつど産出される要素に他ならないと定義されるのである。そして、システムとは、そうした構成要素を産出してゆく作動として考えられるのである。一見したところ、こうしたシステムと構成要素の定義では循環論法に陥ってしまい、何も言っていないに等しいかのように見える。しかし、この循環こそが重要なのである。この考え方に立つと、何が構成要素であるのか、何がシステムであるのか、を外部から決定することはできない。それらを決定するのは、システム自身の働きでしかなくなる。そのつど、システム自身がシステムの働きによって、構成要素を産出しつづけ、そしてその産出の働きによって、システムは、自らを環境から区切りつづけると考えられるのである。こうした、システム自身のそのつどの働きによる自己定義という事態が、閉鎖型のシステム記述のもっとも重要な点なのである。ここには、もはやシステムの「構造」は仮定されない。あるのは、「組織化の活動のみ (Varela, 1984)」ある。そして、その絶え間ない組織化活動の営みが存続する限りにおいて、そのシステムは持続するの

である。この場合、「環境」にはもはや自存的な意味はなくなる。システムの外として環境を定義するのならば、何が環境であるのかは、システム自身が決定することになるのである。そして、その「環境」とは、システムの作動の中に入ることのなかったものであり、入力型の記述において「定義された入力」であったものは、ここでは「定義されないノイズ」、攪乱の意味しか持たなくなる。また逆に、「ノイズ」であったものが一端システムの作動に取り入れられてしまえば、それはすでにシステムの構成要素として、システムの「内」となる。すなわち、システムが環境と出会うということは、システムの自律的な活動に攪乱が加えられるということ、そしてそれが組織化によって再びシステムの構成要素とされるときに、「環境」の意味が立ち現れてくるということなのである。もっと正確に言うならば、「環境」の意味などそもそも存在せず、ただあるのはシステムの一貫した組織化の作動のみなのである。従って、システムが「環境」において出会うものとは、システム自身の「内」にあるものということになるのである。こうした意味で、「閉鎖型」という言葉は用いられるのである。

以上の定義において、「システム」という言葉をそのまま「こころ」という言葉に置き換えて読むことができよう。すなわち、「こころ」とは、環境（外部）から明確に区切られた境界を持つひとつの構造体ではなく、自律的な作動によって自らを環境から区切りつづけていく、一貫した組織化の営みとして考えられるのである。さらに言えば、「こころ」は「思考」を構成要素とするシステムである。「考えること」「感じること」などを産出しつつ、そのつど組織化されつづけていく事象が「こころ」なのである。ひとつの思考は、それに続く思考を生み出す。こうして連続的に構成要素の連関が生じつづけて、位相上の「閉じ」が保ち続けられるのである³⁾。これを分かりやすくするために、ひとつの例を挙げてみよう。例えば、私が遠くの木を見ているとしよう。このとき、こころは「木」の映像を構成要素として産出している、あるいは木を見ているという私の自己意識を構成要素として産出している。そのときの「こころ」のシステムは、木を認識しているという営みの瞬間において成立している事態である。このとき私の「こころ」は空間的に見れば、はるか向こうの木（の映像）にまで延長されている。もし、わたしがそこで目を閉じれば、こころの境界は木からは外れることとなる。また、もしわたしが何かに夢中になって空腹感に気づいていないとすれば、それは心の境界の外にある。そして、わたしが空腹感に気づけば、それはわたしの「こころ」の構成要素となり、境界の中に入ってくることとなるのである。このように、こころはその作動において閉じているが故に、私たちの住む世界の隅々にまで延長されることもあれば、「わたし」の内部にその境界を持つこともあるというパラドキシカルな性質を持っているのである。

2) 平衡モデルを超えて

作動上閉じたシステムにおいて、組織化し続けていく活動とは、その本質的な性質であった。「環境」からの攪乱に不断に出会いつつも、そのつどの再生産の組織化の営みの中で、そのシステムの自己性を維持し続けていくのである。「自己組織化」の研究が示してきたように、組織化においてはノイズは、むしろ排除すべきものというより、組織を変化させ育てゆくのに寄与するものである。このことについてのもっとも著名かつ精緻な研究は、プリゴジーヌら (Prigogine & Stengers, 1984) のものである。彼らは、平衡から遠く離れた系で相転移が生じ再組織化が行われる様子を示した。この考えを応用することで、平衡モデルを超えて、非平衡の追求ということ

考慮に入れた、「こころ」のモデルへの道が開けると思われる。今回は、「こころ」の組織化の営み自体の変化、すなわち「こころ」というシステムの作動がいかにして変化していくかについて論じる余裕はないが、この理論から非平衡状態の追求について何らかの示唆が得られることは確実であろう。しかし、閉鎖型のスタンスにとつては、刺激追求的な活動というのも、実は、そのシステムの自己生産活動の組織化の一端に他ならなくなる。従つて、それは平衡を崩すノイズという意味合いよりも、刺激追求的な活動自体がその「こころ」のシステムの組織化活動の構成要素として考えられるのである。こうした閉鎖型の記述の仕方は、プリゴジヌらの理論とは、視点をかなり異にする。これら2つの考えをどのように折り合わせていくのか、あるいはそれらは相容れないものでありいずれかをより適切な記述として選択しなければならないかは、さらなる考察を待たねばなるまい。

さて今回は、そうしたノイズにさらされつつも、いかにしてシステムがそのシステムとしての同一性を保ちつづけるのか、あるいは、いかにしてそのシステムとしての同一性が保証されるのか、ということについて少し述べておきたい。作動上閉じたシステムとは、構成要素の産出の連関の「はじまり」と「おわり」は再参入的に閉じており、本質的に自己言及的である。こうしたシステムは、いとも簡単に「固有行動 eigen-behavior」を示すことが知られている (Foerster, 1984 (Ulrich & Probst, 1984 所収))。すなわち、再帰的な操作が繰り返されるうちに、その系に固有の挙動の範囲を示すようになるのである。これは、数学的には「不動点 fixed point」の出現ということであり、力学的な文脈からは「奇妙なアトラクター strange attractor」の出現である。システムがシステムとして同一性を示すのは、この不動点の周囲を巡りつつ、再組織化が行われていくときである。従つて環境からのノイズに対して、この組織化の可能な様相は、不動点を共有する限り、複数あることとなる。こうした一定範囲でのシステムの組織化の有り様の変化を、ヴァレラは、システムの自然浮動 (natural drift) と呼んだ (Varela, 1984)。このように、自己言及的な閉鎖型のシステムにおいては、固有行動を維持しつつ、ある範囲内においてそのシステム特有の振る舞いを維持しつづけるのである。従つて、ミクロ的に見ればシステムの行動は非決定的であるが、大局的には、ある範囲内で収まる。これこそが、「こころ」のシステムが不断の組織化を行いつつも、その自己性を維持する所以であると言えよう。

3) 観察の問題

閉鎖型の記述からは、観察の意味付けについても重要な転換が行われる。観察とは、ひとつの「行為」である。観察者が対象に注目し、情報を拾い集めていく行為である。しかし、いかに「客観的」に精緻に観察を行おうと、そこで得られる情報は、その観察者にとって意味在ることとして立ち現れてきた事柄のみである。もっと端的に言えば、これから観察されるべき世界が立ち現れてくるという事自体が、すでに観察者の意味構成の営みの中にあるのである。そこでは従つて、自存的な対象をこれまた自存的な主観が観察するということではなくなる。観察とは、観察者自身の自己組織化の営みに他ならなくなるのである。こう考えると、観察者は決して、現象に影響を与えない透明な存在ではない。観察される現象は、観察者がそこに関わることでしか立ち現れてこないものなのである。従つて、「参与観察 participation observation」とは、何も特殊な観察の形ではなく、あらゆる観察という営みは参与観察として考えられるのである。そして、観察が観察者自身の組織化の営みであるのなら、観察という行為は本来的に「自己言及的である」

という性質を帯びることとなる。私たちが何かについて「見る」こと「語る」ことは、私たち自身の自己言及なのである。こうしたことから、観察の問題について、新しい手法の研究が始まることと思われる。

3. 閉鎖型の記述から見た、「こころ」の病の諸相

では、「こころ」を閉鎖型のシステムとしての観点から捉えたとき、「こころ」の様々な病はどのようにとらえられるのか、また、そこから「こころ」の病の理解と治療にどんな展望が開けてくるのかを、最後に簡単に示しておきたい。ここで展開される議論は、まだごく荒っぽいものであり、思弁的なものにすぎないことをまず断っておこう。しかし、ここでは厳密な事実よりも、閉鎖型の記述によって見えてくる可能性のようなものを示しておきたい。

議論に入る前に次のことを前提として共有しておこう。私たちは社会の中に生きている存在である。社会もひとつのシステムである。コミュニケーションや交換を構成要素とするシステムである。私たちの思考や行為は基本的には「こころ」のシステムの構成要素であるが、それが他者に後続の行為や思考を生じせしめると、それは社会システムの構成要素ともなりうるのである。また逆に、社会システムの中で産出された規範や情報などの構成要素は、私たちの「こころ」のシステムに影響を与え、その構成要素となりうる。従って、社会システムと「こころ」のシステムは、お互いにそれ自体としてはひとつの閉じたシステムであるが、構成要素の一部を共有しよう。さらにまた、私たちの身体もひとつのシステムである。それは生理学的に、ひとつの組織化の系として存在している。「こころ」と身体が深く関連しあっていることは、言うまでもないであろう。このように、「こころ」のシステム、身体システム、社会システムなど、複数のシステムが交錯したところに、「わたし」という現象は生じていることになる。それぞれのシステムは、互いに閉じてはいるが、まさに「わたし」という現象を要にして互いに浸透しあっているのである。身体システムと「こころ」のシステムとは神経系を通して、「こころ」のシステムと社会システムとはコミュニケーションを通して、それぞれ深く浸透しあっており、一方のシステムの構成要素の産出という組織化の営みが、そのまま他方のシステムの組織化に影響を与える場合があるのである。こうした相互浸透という点から、「こころ」の病が生じてくる様子を具体的に記述してみよう。

・妄想

ひとつの「こころ」のシステムにとっては整合的な構成要素の産出であっても、他の「こころ」のシステムや社会システムにとっては作動の閉じの中に回収できない場合、いわゆる「狂気」と言われていた「こころ」の病が生じてくると考えられる。例えば、妄想を例にとってみよう。いかなる妄想も、それを産出する心的システムにとっては、一貫して整合的なものである（Guidano, 1991）。閉鎖型の記述の立場からは、妄想とは決して「こころ」のシステムの崩壊や欠損を意味するものではない。しかし、他の「こころ」のシステムにとって作動の中に回収出来ない場合、それは、了解不能な妄想となる。あるいは社会システムの作動に回収できない場合も同様のことが生じるであろう。また、ひとつの「こころ」のシステムの場合でも、その妄想の産出シス

テムが下位システムとしてあまりにも自律的な作動をしていれば、「こころ」の他の部分の産出関係と相容れない妄想となりうと考えられる。以上のように妄想を定義するならば、妄想の治療とは次のようなこととなるであろう。すなわち、治療者はその妄想自体（すなわち治療者にとってはノイズ）を己の「こころ」の作動のなかに取り入れながらも、治療者の自己性を維持しつつ治療者が自分自身の「こころ」を再組織化していくということが、治療の第一歩となるのである。そして治療者の組織化の構成要素を、患者にコミュニケーションによって渡しつつ、患者がより広くより柔軟に自己の組織化ができるように助けていくことが、治療に他ならないのである。これは心理療法において実際に行われている事柄を、よく表現している。すなわち、治療者が患者に参与しつつ、治療者自身が自己を治癒しつつけていくということが治療の根本であるという事実を、閉鎖型のシステムの記述でうまく描き出すことができると言えよう。

・多重性人格障害

また、閉鎖型の記述では、解離性障害や多重性人格障害について、無理のない記述と説明を行うことができる。多重性人格障害は、幼少期、すなわちその人の人格の組織化がまだ比較的シンプルな系をなしている時期の、反復的な外傷体験が原因となって惹き起こされる。反復的な外傷体験は、そのシンプルな人格の組織化の作動の中に含めるには、あまりにもノイズとして大きすぎる場合がある。従ってその情動的な記憶を構成要素として作動する、別の人格の組織化が開始されることとなる。そしておのおのの人格はそれぞれに作動の閉じを形成し、おのおのの不動点を持ちつつ組織化されていくこととなる（Goertzel, 1995）。これに対して、ある程度人格の組織化が複雑な系になった時期の外傷体験は、それ自身では組織化を開始しえず、もっと組織化の不完全な解離性障害や PTSD として留まると考えられる。さて、多重人格の場合、ひとつのシステムのみが、その人の身体システムと結びついており、他方の人格は存在していても、他者とのコミュニケーション過程には上ってこないの知られることはない。しかし、何かの大きなノイズとなりうる出来事をきっかけに、ひとつの組織化は別の組織化のあり方へと相転移し、別の不動点を持つ自然浮動（固有行動）へと移行すると考えられる。こうした見方をすると、その治療の経過についても、おもしろい示唆が与えられる。例えば、それぞれに同じ程度に組織化された2つの人格の交替する古典的な二重人格の場合、治療の過程で第3の人格が新しく出現してくることが多い。この第3の人格は、2つの人格の行動について知っており、最終的に人格が統合されたときには、この第3の人格のみが残るという例が報告されている。この第3の人格は、組織化という観点からは、以下のように説明できる。すなわち、2つのそれぞれに自律的な組織化のサイクルが相互交渉を行い競合していくと、その競合面には2つのサイクルの大局的な共通の解であるような、第3の不動点が生じてくる（Kugler et al. 1990）。この不動点が新しい吸引域を形成し、やがては、もとの2つのサイクルは統合され、第3の不動点のまわりを巡る新しい組織化の営みが形成されるのである。従って二重人格の治療の経過は、数学的な必然性とも言えるのである。もちろん、さらに多くの人格の存在する場合や、それぞれの人格の組織化の度合いに差異が有る場合など、実際に辿る経過はもっと複雑のようである。しかし、人格（あるいは「こころ」）を組織化の閉じた作動としてみる見方により、解離性障害などの理解に新しいモデルが提供できることは、確実である。

4. 結びにかえて

本稿では、閉鎖型システムとして「こころ」を記述してきた。以上のような、入力型の記述から閉鎖型の記述への移行は、些細なことに見える場合もあるが、実は、根本的な大きな転換である。そこでは、システムや環境といったことの意味が大きく変わってしまう。そして、入力型の記述では全く解決不可能なアポリアであった事柄も、閉鎖型の記述では、ごくシンプルに解決がついてしまい、その問題が「見せ掛けの問題」であったことが判明する場合も多い。この記述にはまだ直観的なところも多く、これまで数多くの人々によって積み上げられ洗練されてきた「入力型」の精緻なモデルの代替案としては、貧弱に見えるかもしれない。しかし、「こころ」の理解に関してどんな可能性が生まれてくるかは、この小論においてある程度示せたのではないかと思われる。「こころ」を観察者から切り離して論じるのではなく、観察者をも含めたひとつの営みとして捉えるという「こころ」の科学の新しい方法論を考慮してみる価値は十分にある。それは特に「こころ」の治療を、そこに参与する治療者をも含めて理解し記述する道を開くであろう。それは場合によっては、記述者の自己言及の深い森に迷い込むことになりうる恐れもある。しかしそこを通してこそ、これまでは「経験」や「直観」に基づいてしか体系化しえなかった「こころ」の治療論について、はじめて基礎となる方法論を提示することも期待できると言えるのである。

註

- 1) 閉鎖型 (closure type)、入力型 (input type) という名称は、Varela, 1984 (Ulrich & Probst, 1984 所収) に依っている。
- 2) しかし、フロイトにとって反復強迫は、生命の始源でもあり終極でもある「死」への欲動によるものであり、これも平衡モデルを採用していることとなる。
- 3) 「こころ」は非常に複雑なシステムであり、その全体像を捉えるには、単なる作動上の閉じというだけでは、不十分である。例えば、「こころ」の自己言及性がある。「こころ」は自らの作動を行なうと同時に、今度はその作動自体を構成要素として作動する自己言及的な観察システムである。こうした性質から、いくつかの特徴的な性質が出てくる。ひとつは、意識－無意識の区別である。「こころ」の第1次的な作動そのものは、当の「こころ」によって捉えることはできない。「こころ」の自己言及的な観察という一段高次の作動（第2次的な作動）の構成要素となりうる第1次的な作動の構成要素のみが、「意識」として自己言及の観察システムに現れ、その他の第1次作動の構成要素は「無意識」の中に沈んでいく、と考えることができよう。また、「言語」に関する問題も生じてくる。「言語」という体系によって、「こころ」はその作動に影響を受け、さらにその営みは複雑化してくる。これらはいずれも大きな問題ではあり、論じる機会是他に譲るしかあるまい。
- 4) 情動は、おそらく「こころ」のシステムにとって、もっとも基本的な構成要素であり、これを核に組織化の過程が進行すると思われるが、この考察も別の機会に譲る。

参考文献

- Bertalanffy, L. v. 1968 General System Theory—Foundation, Development, Applications. George Braziller Publisher.
邦訳：長野敬・太田邦昌（訳）1973 一般システム理論。みすず書房。
Goertzel, B. 1995 Belief Systems as Attractors. *Chaos Theory in Psychology and the Life Sciences*,

Pp. 123 - 134.

Goldstein, J. 1995 Unbalancing Psychoanalytic Theory : Moving Beyond the Equilibrium Model of Freud's Thought, *Chaos Theory in Psychology and the Life Sciences*, Pp. 239 - 252.

Guidano, V. F. 1991 *The Self in Process*. The Guilford Press.

Kugler, P. N., Shaw, R. E., Vincente, K. J., Kinsella-Shaw, J. 1990 Inquiry into intentional systems I : Issues in ecological physics. *Psychological Research*, vol 52, 98 - 121.

Maturana & Varela 1980 *Autopoiesis and Cognition : The Realization of the Living*. Reidel Publishing.

邦訳：河本英夫（訳）1991 オートポイエーシス——生命システムとはなにか——，国文社。

Prigogine, I. & Stengers, I. 1984 *Order out of Chaos ——Man's New Dialogue with Nature*. Alvin Toffler Bantam Books.

邦訳：伏見康治・伏見譲・松枝秀明（訳）1987 混沌からの秩序。みすず書房。

Ulrich, H. & Probst, G. J. B. (ed.) 1984 *Self-Organization and Management of Social Systems*, Springer-Verlag.

邦訳：徳安彰（訳）1992 自己組織化とマネジメント。東海大学出版会。